

## (133) ミモザとガレット・デ・ロワ

新年を迎え、春の気配を少しずつ感じる毎日だ。お花屋さんには黄色いミモザの花が明るく飾られ、パン屋さんには大小さまざまな「ガレット・デ・ロワ」が並んでいる。この時期は毎日のように食している。東方の三博士がキリストの生誕を祝いに訪れたのが「公現祭(エピファニー)」だ。キリストの生誕から2度目の日曜日(つまり新年が開けて最初の日曜日)で1月6日と定められている。



この「公現祭」にいただくのがパイ生地の焼き菓子「ガレット・デ・ロワ」で中に「フランジパーヌ(アーモンドクリーム)」が入っている。どっしり感がありお腹に貯まる冬のお菓子である。そして「フェーヴ」という陶器のミニチュ

アが入れてあり、 「フェーヴ」に当 たった人には幸運

が訪れるという新春らしい食の文化である。ミモザの花をテーブルに飾って「ガレット・デ・ロワ」をおやつやデザートにいただくとフランスの新春を実感する。

年が明けてもウクライナ戦争が終結する気配はなく、 コロナやインフルエンザは依然として流行が続き、イ ンフレも止まることなく、購買力の低下に不安が広が



る社会である。さらには段階的に受給年齢を64歳に延長する「年金法改正案」が提示され、フランスの8つの労働組合全部が19日(木)に年金法改正反対のストライキを行う。メトロもバスも列車も動かず、学校や病院も閉まり、一日家でじっとしているよりない日になりそうだ。一日だけで終われば良いが無期限ストライキを予告している労働組合もある。

年末から記録的な暖かさが続いていたパリだが、15日から寒波が戻り月末まで寒さが続く予報もあって「KIMONO展」見に行くことにした。

場所はパリ7区セーヌ川に沿って長く伸びる「ケ・ブランリー美術館」である。2006年オープンした「人類博物館とアフリカ・オセアニア美術館」で、当時の大統領ジャック・シラク(1932-2019)(大統領任期1995-2007)の肝入りで西洋以外の異文化に捧げられている。

ジャン・ヌーヴェル(1945~)の現代建築としても知られ、セーヌ川側の外壁は植物学者でペイザジストのパトリック・ブラン(1953~)が壁面に植物を配して緑の空間を創っている。

建物を囲む広い庭園もこの10年で木々が大きく成長した。2013年春「ポール・ジャクレ 浮世絵展」は素晴らしい展覧会だったが、庭の桜の木も大きくなり、ススキやシダの葉も 目立って背が高くなってきた。

今回の「KIMONO展」は2022年11月22日から2023年5月28日 の半年間という長い開催だ。江戸後期の小袖から始まり、特に 着物が海外でどのように変遷したか、そして現代着物に焦点を当 てた展示になっている。日本を代表する高田賢三、森英恵、三宅 一生が亡くなり、日本の服飾文化を世界に伝えていく新たな着物 デザイナーとして柴崎るみと斉藤上太郎の二人が言及されている。

日本人にとって着物は日常から遠くなりつつある。結婚式、入学式、七五三の参拝、初詣、成人式など晴れの日の特別な装いに限られ、日本人のアイデンティティとしての着物は着るものから保存するものになりつつある。四季折々の草花、鳥や動物、山々や川の流れ、牛車や縁起物が大胆に配された構図、季節や用途に応じて絹、麻、木綿と使い分けられる生地、染めや刺繍、着物に欠かせない帯や帯締め、草履、足袋、長襦袢、帯上げ、櫛やかんざしと着物文化は頭から足の先まで日本の伝統工芸品の結晶である。





我々日本人にとってもだんだん遠くなっていく繊細で豊かな着物の歴史を今日のパリで「KIMONO展」として紹介する意味は何だろうと考えた。19世紀以降日本の着物はヨーロッパの洋服文化に合うように変形された。日本の複雑な着物コードはなくなり、自由なインスピレーションで着物を楽しむのである。日本のアニメが定着したフランスにおいて、着物もアニメのキャラクターと同じ存在なっているようだ。経済も文化も不安材料が尽きないフランスで異文化に目を向けることで取捨選択や新たな出口を模索する場として「KINOMO展」を見ることができれば、単に美しいで終わることなく新たな意味が生まれるのではないかと思う。